

第4学年1組 道徳学習指導案

指導者 荒井庸子

児童数 31名

1 主題名

受け継がれる生命 3－(2) 生命の尊重

資料名 「バルバオの木」(東京書籍)

2 主題について

(1) ねらいとする価値について

中学年の3－(2)では、「生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすること」がねらいである。「命はたった一つしかないもの」「命を大切に」ということは、家庭でも学校でも言われているため、生命の大切さに対する理解はあるものの、実感を伴って生命の尊さをとらえるまでには、至っていない子どもが多い。私たちにとって、もっとも身近な「食」を通して、他の生命の支えなしには生きられない事実や受け継がれる生命のたくましさを感得させたい。そのためには、生命は自分一人だけのものではなく、連綿と受け継がれてきたものであることや、自然の中で支え、育まれてきたものであることなど具体的に考えることが大切であると考えます。

(2) 児童の実態

子どもたちは、様々な体験や学習を通して、漠然とではあるが、自他の生命の大切さを理解している。ただ、子どもたちが、生命の大切さを真正面から考える機会は少なく、テレビや新聞で同世代の子どもの生死に関わる事件を紹介しても、その受け止め方には個人差が大きく、自分とはかけ離れた世界の出来事としてとらえている子どももいる。また、おもしろさ・スリル感が先行し危険な遊びをしたり、些細な言い争いから乱暴な言葉や行動を友達に与えてしまったりすることもしばしばある。そこで、本学習では、私たちにとってもっとも身近な「食」を通して、様々なつながりの中で生きている自分を自覚し、自分の命も他の命も大切にすること、そして前向きに生きていこうとする気持ちを育てていきたい。

(3) 資料について

樹齢何十万年のバルバオという大木が、飢えに苦しむ鳥やシカ、ゾウたちに食べられるため、実や葉、最後は自分自身の幹を投げ出し、動物たちの危機を救う。敬けんの心にも通じる感動的な話なので、一人一人印象深い場面が心に残るであろう。子どもたちの感動を大事にして感想から話し合いを進めていきたい。なぜ、その場面が心に残ったのか、どんなことを感じたのかなどを聞き取りながら、中心発問へとつなげていくようにする。例えば、バルバオの木が地響きを立てて倒れた場面がすごいと思った子どもに対して、「バルバオの木はゾウたちに食べられるために倒れたんだね。バルバオの木はどんな気持ちから、ゾウたちに食べられようとしたんだろう。」と発問することで、自分の体を提供することで生命を次世代へつなげていこうとするバルバオの木の心情を押さえていきたい。また、食べることを通してバルバオの木の生命をも受け継いだというゾウたちの心情に迫りたい。

(4) 教師の支援や工夫

- ① 各教科や特別活動及び総合的な学習の時間との関連を図って (資料1参照)

② 互いの考えを聴き、かかわり合う場の工夫

中心発問「バルバオの木のみきや枝を食べながら、ゾウたちはどんなことを思ったでしょう。」では、子どもたちに考える時間を十分に取って、一人一人の発言（反応）を大切に、単なる一問一答に終始しないように留意したい。バルバオの木の幹、すなわちバルバオの木の命をもらったゾウたち。鳥やシカたちが実や葉をもらって食べて「助かった」「バルバオの木はやさしい」と感じた場合と違い、「バルバオの命をもらって生きている」「バルバオの木は自分を犠牲にしてまで自分たちを助けてくれた」といった「受け継がれていく生命」に気づかせたい。

日ごろから挙手する子どもが限定され気味だが、意図的指名をし、より多くの子どもからいろいろな思いを引き出すよう配慮し、話し合いを深めるようにしていきたい。また、自分から話さない子どもには、恥ずかしくて話せない、話す習慣がないなど様々な理由が考えられる。そのような子どもには、「友達の意見を聞いて自分は同じなのか、違うのか」など、話す糸口となる補助発問を準備しておき、自信をもって自分の考えを話せるように支援していきたい。

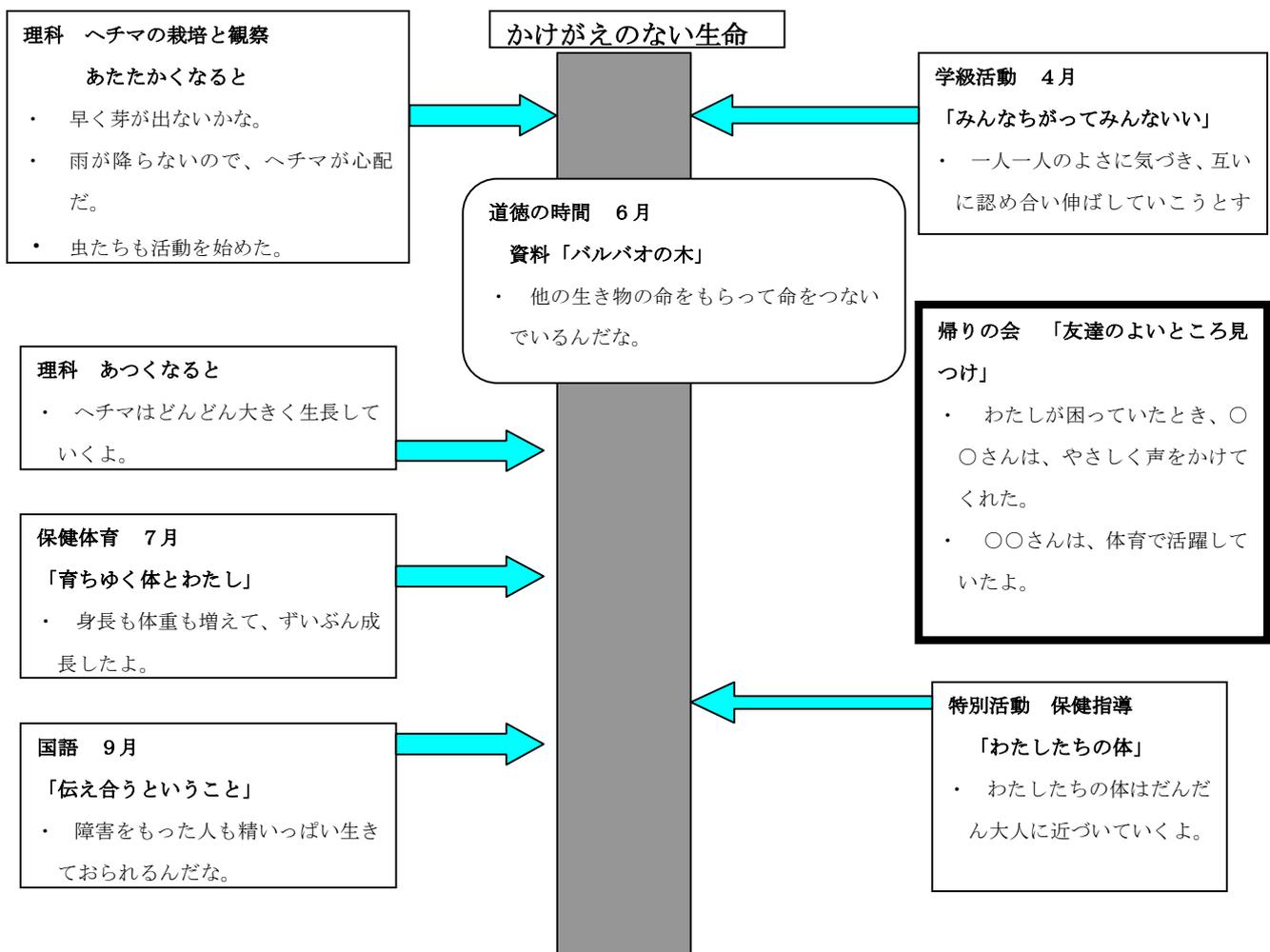
また、教師に向かって話すといった形式にならないように配慮し、教師は子どもたちの発言を記録しまとめる役になり、子ども同士の話し合いになるよう試みてみようと思う。

③ 家庭との連携を図る工夫

授業で扱った資料と子どもの感想を書いたプリントを家庭に持ち帰り、保護者ともう一度話し合う機会を設け、家庭との連携を図る。親子で授業の感想や語り合うことは、道徳教育への理解と協力を得ることに効果があるだけでなく、保護者が我が子を見つめ直す機会になると考えられる。

子どもにとってももう一度資料を読むこと、保護者と話し合うことで、授業では気づけなかった、より高い価値や他の価値に気づくこともあるだろう。特に、家族の誕生や死、家族の病気やけがなどに遭遇した際、改めて「生命の大切さ」に気づく。保護者から自分が誕生したときの思いを聞いたり、家族が亡くなったときの悲しい思いを思い出したりすることは、子どもの心に響くものがあるはずである。家庭との連携を図って、日々の教育活動に生かしていきたい。

〈 資料 1 〉



道徳の時間 11月

資料「500人からもらった命」

- ・ 命はかけがえのないものだから、大切にしよう。
- ・ 他人の命を救いたいと願う心が誰にでもあるよ。
- ・ 命あるものを大切にしていこう。

理科 すずしくなると

- ・ ヘチマは枯れたけど、種を残したよ。

道徳の時間 2月

資料「命のにぎりめし」

- ・ 命や体、心などは、お金よりすばらしい宝物。自分と同じように周りの人も大切にしていこう。

理科 生き物の一年を振り返って

- ・ 植物も種で命を残しているよ。
- ・ 昆虫も卵で命を残しているよ。

わたしたち生命あるものは、互いに支え合って生きている。自他のかけがえのない生命を尊重しながら生きていこう。
自分に自信をもって、夢をもって生きていこう。

3 本時の学習

(1) ねらい

- 受け継がれる生命のたくましさ感動し、生命あるものを大切に育てる。
 - ・ バルバオの木が他の生き物のために、自分の体を犠牲にしたことに感動する。
 - ・ 「食べる」と「生命」がつながっていることに気づく。
 - ・ 自分の生命は受け継いだ生命であり、次世代へつなげなくてはならないことに気づく。
 - ・ 生命あるものを大切にしようとする心を自分ももっていることに気づく。

(2) 展開

学習活動と予想される児童の反応	支援 (○) 評価 (☆) 気になる子 (*)
1 自分の好きな食べ物について自由に発表し合う。 好きな食べ物は何ですか。 ・ 果物、ケーキ、ハンバーグ、ステーキ・・・	○ 今朝、朝食で何を食べたかを発問したりしながら、資料への興味・関心を高める。
2 資料「バルバオの木」を読んで話し合う。 ① このお話を読んで、どんなところが心に残りましたか。 ・ バルバオの木が花を咲かせ、花がたちまち実になったところが不思議。 ・ バルバオの木が地響きを立てながら倒れたところがすごい。	○ バルバオの木の実や葉を食べることで、やっと生きのびることができた鳥やシカたちの喜びに共感させる。 ○ ここでの反応をもとに、③からの発問につなげていくようにする。直接関連がなくても、「バルバオの木の実はおいしかったのかな。木の実を食べながら、鳥たちはどんなことを思ったの

- ・ バルバオの木がゾウたちのために自分の体を犠牲にしたところに感動した。
- ・ 鳥やシカたちは、「ああ、助かった。これで生きることができるぞ。」とバルバオの木に感謝しているだろう。
- ・ バルバオの木は、自分の体を食べさせるなんてとてもやさしいと思った。

② バルバオの木がゾウたちに「わたしのみきを食べなさい。」と言ったのは、どんな気持ちからなのでしょう。

- ・ わたしは長い間生きてきたので、ゾウたちに自分の命をあげよう。
- ・ ゾウたちには自分の分も生き続けて欲しい。
- ・ わたしはまた新しく生きることができるけど、ゾウたちにはそれができないんだ。

③ バルバオの木のみきや枝を食べながら、ゾウたちはどんなことを思ったでしょう。

- ・ バルバオの木はとてもやさしいなあ。
- ・ これでなんとか生き延びることができるぞ。
- ・ バルバオの木に命をもらったんだ。
- ・ バルバオの木の分も、がんばって生きるぞ。

3 「食」と生命のつながりについて話し合う。

④ 「食べる」ということは、私たちの生命とどのようにつながっているのでしょうか。

- ・ 「食べる」ことで、わたしたちは生きている。
- ・ 食前に「いただきます」と言って食べているよ。
- ・ 他の生き物の命をもらって、わたしたちは命をつないでいる。だから、感謝しなくてはいけない。
- ・ 食事を残さないで食べているってことは、他の生き物の命を無駄にしていないことだと思うよ。
- ・ わたしの命も、両親・祖父母、その前の先祖から、ずっとつながってきている。これからもつなげていかなければいけない。

4 振り返りカードを書く。

でしょうね。」などと切り出し、つなげていくようにする。

○ 「食べられることで、また新しく生きることができる」というバルバオの木の言葉を指摘しながら、自分の体を提供することで生命を次世代へつなげていこうとするバルバオの木の心情を押さえる。

* 自分の感情を抑えることが苦手なA児には、自分の体を犠牲にしてもゾウたちを救いたいというバルバオの木の気持ちを考えさせたい。

○ バルバオの木への感謝の気持ちとともに、食べることを通してバルバオの木の生命を受け継いだというゾウたちの心情に迫りたい。

☆ 生命とは受け継いだものであり、次世代へつなげなければならぬことに気づくことができたか。(発言、つぶやき)

○ 「食べる」「生命」「つながり」というキーワードに注目させ、受け継がれる生命のたくましさを感じ取らせる。

○ 「食べる」ということは、食べられる他の生き物の命をいただくことであり、そのことを通して、わたしたちは生命を保つことができること、そして自分の命もずっと受け継がれてきたものであることを押さえたい。

○ 命を大切にしている心が自分にもあることを自覚させたい。

☆ 「食べる」と「生命」がつながっていることに気づくことができたか。

(プリント、発言)

○ 「食べる」ことの意味をまとめ、他の生命の上に成り立っている自分の命に目を向け、大切にしていこうという意欲を高めたい。

(3) 授業の視点

- ・ ねらいに迫るための資料の選択や発問、話し合いを深めるための教師の支援は適切であったか。

4 実践を振り返って

(1) 子供の感想を大事にした展開

T : (資料を読む)

どんなところが心に残りましたか？感想を聞かせてください。

C : バルバオの木が動物たちにいろいろなものを食べさせてあげたところが、やさしいなと思いました。

C : ぼくもバルバオの木はやさしいなと思いました。

T : どんなところでやさしいなと思いましたか？

C : 自分の葉や実など、身をけずってまで他の動物たちを助けてあげたところです。

T : 鳥たちは、どんな気持ちで食べていたのでしょうか？

C : 感謝の気持ちで食べていた。

T : 感謝って、どんなことを感謝していたのかな？

C : 鳥やシカたちは、食べ物がなくて腹が減っていたから、とてもありがたい、ありがとうという気持ちだと思います。

C : わたしは、バルバオの木が地響きをたてて倒れたところがすごいなと思いました。

この資料を読み終えると、「バルバオの木って、やさしいね。」というつぶやきが聴かれた。飢えに苦しむ動物たちのために自分自身の幹を投げ出し、動物たちの危機を救うバルバオの木のやさしさに感動した子どもたち。印象に残った場面や感想を発表させながら、中心発問「バルバオの木は、どんな気持ちで『わたしの幹を食べなさい』と言ったのでしょうか。」につなぐことができたと思われる。このような感動資料を扱う際、子どもたちのつぶやきを大切にすることによって、中心発問へと子供の思考過程を導くことができるので、発問を最小限にしてじっくりと話し合うことができた。また、黒板に掲示した大きなバルバオの木は、迫力があり、子どもたちの意識を集中する意味で、とても効果があったと思われる。



(2) 聴き合い、かかわり合う場の工夫

中心発問では、ワークシートを使い、自分の考えをまとめるために十分な時間をとり、自分の体を提供することで生命を次世代へつなげていこうとするバルバオの木の心情を押さえるように心がけた。また、子ども同士の話し合いになるよう、教師は子どもたちの発言をまとめてから板書することにした。

C1 : このままではゾウたちがかわいそう。わたしはもう何十万年も生きてきたから、わたしの命をあげよう。

C2 : わたしの体を動物たちの役に立てて欲しい。

T : 役に立つってどんなふう役に立つの？

C2 : 自分の幹を食べてもらってゾウたちに生きのびてもらおうことです。

C3 : バルバオの木は、何十万年もかけてまた生まれ変わることができるから、北の方へ行って鳥たちに生きのびてがんばって欲しいという気持ちだったと思います。

C4 : ぼくも似ていて、バルバオの木は何十万年も生きてきたからもういいや、ゾウたちに生きて欲

じっくり考えて自分の考えを発表することができてよかったです。友達の発表の中で特に、Nさんの発表は分かりやすく、聴きやすかったです。ぼくと一緒の意見の人もいたけど、違う意見の人もいました。

バルバオの木は、動物たちに実や幹を食べさせたところがやさしいなと思いました。自分の命をあげて動物たちは、生きのびることができたと思います。 H・M

今日は、少し緊張してあまり発表することができませんでした。今度は、自分の思ったことをもっと発表したいと思います。

食べる→命→食べる→命とずっとずっとつながっているんだなあと思いました。

わたしの命も、先祖からずっとつながっています。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん・・・命は大切にしなくちゃいけないなと思いました。 K・M

5 協議会記録より

- ・ 子どものつぶやきを拾いながら、切り返しの補助発問をすることで、話し合いが深まっていった。
- ・ 子どもの発言を聴いてから分類して板書することで、子どもたち自身が自分の考えがどこに位置付くのかとらえやすかった。子どもの生の声を板書することで、より意見の微妙な違いが明確になり、話し合いが深まったかもしれない。
- ・ 資料の中には、様々な価値が含まれている。資料分析をし、ねらいに迫るためにはどの部分を中心発問として取り上げたらよいか、十分に考えることが必要である。この資料の場合、「受け継がれる生命のたくましさ」と「生命あるものを大切にする」という二つのねらいがある。どちらか一つに絞った方がよかった。
- ・ 今後授業を進めていく上で、全体へのねらいを考えるだけでなく、特に焦点を当てたい子どもへのねらいもあればよい。アンケート、日記、行動、発言など日ごろから子どもたちの実態を把握し、子どもの価値観（本音）をつかんでおくと、ねらいを考える際に役立つ。
- ・ かかわり合いを深めるためには、切り返しと意図的指名が大切である。書く時間を十分に取、机間巡視しながらメモをとり、意図的指名に生かす。その子どもには、事前に声かけをし、自信をもたせておくことも必要である。
- ・ 発表する際、書いた物を読む子どもが多い。話すことと書くことは違い、メモは考えをまとめる手段である。みんなに伝えることを意識し、自分の言葉で話すことができるよう、指導していくことが大切である。